

# ボランティアの社会心理学的含意に関する一考察： 社会構成主義の視点から

八ツ塚 一郎

## Significance of the Volunteer for Social Psychology: From the Viewpoint of Social Constructionism

Ichiro YATSUZUKA

(Received September 2, 2002)

There are ordinary understandings about volunteer, that is to say, volunteer is gratis activity and social service, and is carried out on one's own initiative. But these statements are inadequate for the rigorous definition of volunteer. From the viewpoint of social constructionism, volunteer is regarded as a socially constructed reality. Volunteer fulfills some social functions that are not always satisfied in modern capitalist societies, such as welfare works, development assistance, and so on. "Volunteer" is these various and peculiar functions in this capitalist societies. They are named and objectified to the concrete reality "volunteer", and this reality is accepted to our life-world. Possibilities of investigation about volunteer on this social psychological aspect are discussed.

**Key words :** volunteer, social constructionism, capitalist society

### 1. はじめに

本稿の目的は、ボランティアという現象を社会心理学的に考察するための、前提となる諸問題を整理することである。心理学は、ボランティアという問題を、どのように把握し、扱っていけば良いのか。ボランティアという、具体的な現象を研究の対象とする場合、そこには、いかなる論点、いかなる研究の可能性が開かれているのか。本稿ではこうした問題を検討し整理する。

同時に、ボランティアという現象を研究することには、どのような意義があるのか、という問題をも、あわせて検討する。ボランティアという現象を扱うことは、心理学という学問領域に対して、いかなる新たな視座をもたらすのか。ボランティアという個別のテーマから、より一般的な知見を導き出すことは可能なのか。これらの問題にも本稿では論及する。

福祉や防災など、社会政策の領域においては、ボランティアの有効性が、既に共通の認識となって久しい。また、企業の社会貢献に関する議論も、ボランティア活動への企業的取り組みの進展と、軌を一にして展開してきた。さらに、近年では、教育の領域において、社会奉仕活動をめぐる議論が盛んである。介護等体験の活動は、既に教育活動の一部を占めるようになっていている。

「ボランティア」の概念、あるいは、ボランティアと関わりの深い、種々の活動、諸概念が、社会におけるその存在感をいや増す中、これらの概念に対して、明確な視座を設定し、論点を整理すること、さらに、それらと連動した実証的な研究活動を蓄積していくことは、社会心理学に

とっても奥深い課題である。本稿は、そのための準備作業として、社会心理学がボランティア現象を把握するための、留意点とでも言うべき論点の整理を試みるものである。

本稿の構成は以下の通りである。第2章においては、ボランティアに関する日常的な定義、あるいは日常的な理解とでもいうべきものを取り上げ、それに対する再検討を行う。この検討を踏まえて、第3章で、社会構成主義の観点から、ボランティアという現象に対する再定位を行う。第4章では、以上の議論をもとに、ボランティアという現象のもつ広がりと、社会心理学的研究に対するその意義とを整理する。

## 2. 日常的定義の諸問題

ボランティアに対する日常的な定義、あるいはその属性として、われわれは、「無償性」「社会奉仕性」「自発性」などの項目を挙げることができる。しかし、あらためて検討してみると、これらの属性は、具体的な現象との関係のうえでも、また、その論理構造のうえでも、ボランティアに対する包括的な定義とはなり得ず、むしろ、検討すべき新たな論点を惹起する。以下、これら3つの属性、あるいはそれに基づく定義について、順次検討する。

第1に、無償性という属性について検討する。ボランティアとは、無償の活動のことである。ボランティアは、金銭的報酬を求めない。このような理解は、幅広く社会に普及している。ボランティア活動が、社会的に評価され、善行として讃められる理由も、こうした無償性にある（「何の見返りもないのにえらいわねえ」）。

しかし実際には、ボランティアの活動は、無償性によっては特徴づけられない。実際のところ、金銭の支給を、最初から制度化して運営されているボランティア活動がある。生協などが管理主体となり、単位時間や謝礼金額も明確化されている、いくつかの家事サービス活動などは、その典型である。

あるいは、謝礼という形ではなくても、交通費など、活動のための実費を、ボランティア団体の側が支給することは珍しくない。災害救援活動において、受入れ団体側が、ボランティア保険の保険料を負担する、などの例もある。

さらに、たとえば阪神・淡路大震災などにおいて注目されたような、企業派遣のボランティア、あるいは、企業のボランティア休暇制度、などといったものがある（八ッ塚、1998）。企業活動の一部として、地域でのボランティア活動に従事したり、あるいは、勤務先企業もいわば承知のうえで、休暇を取ってボランティアに赴いたり、などといった生き方は、現在では、決して奇異なものではない。制度によって相違はあるが、「会社から給料をもらいながらボランティア活動に従事する」ことも、実際に可能なわけである。

そもそも、どのような種類のボランティアであれ、実りのある活動を遂行するためには、少なからぬ経費が必要である。いかなる活動も、金銭と無縁ではあり得ない。また、ボランティア団体の規模が大きくなれば、当然、管理運営のための資金も不可欠である。周知の通り、開発援助などに従事する、大規模なNGO団体は、膨大な数の専従スタッフ、有給のスタッフを擁している。人員や資金力などの点では、企業に匹敵するほどの「ボランティア団体」も、決して珍しくない。こうした団体で働く人々は、文字通り、「給料をもらっているボランティア」なのだとということになる。

もとより、これらの現象に対しては、様々な議論があり得る。ボランティアである以上、どん

な形であれ謝礼は拒否すべきだ、という考え方の人もある。企業におけるボランティア休暇制度についても、イメージ戦略である、一種の労働者サービスである、等々、ボランティアの本義を歪めたものだ、という捉え方をすることは可能である。NGO職員はもはや団体職員であって、ボランティアとは呼べない、という指摘もあるかもしれない。

しかし、あくまでも「無償性」という定義に固執し、上述したような事柄を除外してしまうとすれば、われわれは、眼前でダイナミックに展開する、ボランティアをめぐる諸現象の特質を、見落としてしまう恐れがある。それゆえ、本稿では、ボランティアという現象が、むしろ、いわゆる「無償性」という定義を、大きく踏み出しつつあるのだ、という点に着目することにする。

第2に、社会奉仕性という属性について検討する。ボランティア活動とは、社会に貢献する活動、奉仕する活動、すなわち良き活動である。こうした理解も幅広く普及しており、疑われることはあまりない。自分だけが利益を得ようとする活動とか、社会に害悪を及ぼす犯罪的活動などは、確かに、ボランティア活動とは言い難いものである。

しかし、この属性に基づく定義は、ボランティアの活動における、極めて微妙な側面を、看過せしめる危険をも孕んでいる。この問題については、阪神・淡路大震災におけるボランティア活動の事例を取り上げるのが好適である。

阪神大震災に際しては、学生を中心とした多くのボランティアが救援活動に従事し、広範な社会的関心をも集めた(八ッ塚, 1999)。ボランティアの重要性、有用性を広く知らしめる、という点で、近年の画期となつた出来事のひとつが、阪神大震災であったことは疑い得ない。

さて、阪神大震災発災の折には、救援活動の遅れや、被災者に対する支援制度の不備などといった問題が、強く指摘された。たとえば、海外からの救援申し出に対する受け入れ官庁側の対応、公的支援制度の不十分、避難所運営や各種証明書発行等の業務に関する不満、等々、既存の行政体における、官僚主義の蔓延や対応の硬直性を、震災体験は、人々に強く印象づけた。

阪神大震災時に、ボランティアの活動が高く評価された背景には、こうした事情がある。官僚主義や、制度そのものの不備、不全がもたらす困難に対処し、被災した人々に対する、きめ細かな支援を行うこと。こうした役割を果たしたのが、震災時のボランティアであった。もとより、各種報道で喧伝されたような、理想的な活動が展開されたわけではないし、様々な立場から評価はなされるべきである。しかし、少なくともその原理的構造においては、ボランティアは、行政の不備の対極、言ってみれば、當てにならないお役所に対するアンチテーゼとして受容された。

さらに視野を広げて考えるならば、次のような点を指摘してもよい。災害救援に際しては、ボランティアによる訪問活動など、きめ細かい、地道な対面的取り組みが、とりわけ高く評価された。すなわち、人と人とのつながりが薄れた現代社会において、人間本来の親密さを回復し、都市社会における、新たな人間関係のあり方を提示した、という点にも、ボランティアへの評価と関心を高める所以があった。

このような点を考えると、ボランティアの属性として、「社会奉仕」「社会貢献」を無条件に取り上げることについては、慎重にならざるを得ない。奉仕や貢献の内実、あるいは、奉仕や貢献の対象としての社会、こうした問題について、繊細な検討を行う必要がある。

端的に言うと、阪神大震災に際して、ボランティアが幅広い関心を集めた背景には、既成行政体批判や現代社会批判といったモチーフの伏在を挙げることができる。言い換えると、ボランティア活動興隆の背景に、われわれは、既存の社会システムに対する変革の志向、あるいは、そうした志向への共感、といった動向を、見て取ることができる。

阪神大震災時に、ある災害救援ボランティア団体の代表を務めた人物は、次のような意味の言

葉を残している。「ボランティアは、決して行政の下請けの位置に止まつてはならず、対等の立場で企業や行政に発言できる第3セクター、草の根の民主主義の担い手とならなくてはならない」(八ッ塚・矢守, 1997)。

南北問題、貧困、環境問題、人権問題、社会的弱者に対する支援、教育、等々、ボランティアの取り組む問題は多彩である。これらの問題の、背景や原因を取り除き、問題そのものを解消することを目指すならば、人は当然、社会構造のあり方そのものへと、関心を向けざるを得ない。たとえば、行政の施策や企業活動のあり方を問い合わせし、あるいは、人々の生活習慣や価値観それ自体をも見直していくような、そうした広がりをもった活動を築いて行く必要がある。こうした認識や取り組みを欠いたまま、単に目先の問題に取り組むばかりでは、結局のところ、社会問題を生み出す構造をむしろ温存し強化することにもなりかねないということ、これについて、贅言を費やす必要はないであろう。

ただし、社会批判や行政批判のモチーフこそが、ボランティア活動を特徴づける共通の属性である、と断言することに対しても、われわれは慎重な態度を取らなくてはならない。たとえば、阪神大震災において、救援ボランティア活動に参加した個人や団体のすべてが、社会批判のモチーフを持っていたというわけではない。政策的主張を活動の一部として行った人々や団体は、必ずしも多数派というわけではない。

むしろ、特定の政党色や宗教色等を帯びていないからこそ、震災ボランティアには参加しやすかった、という、ボランティア初体験者の声も、震災時には散見された。いわゆる政治活動や宗教活動には関心がない、あるいは参加しにくい思いを抱いていたが、災害救援ボランティアには惹きつけられ、あるいは気軽に参加できた。こうした側面は、阪神大震災においても、また、日本海重油流出事故等の際のボランティア活動においても、顕著に見出されるものである。

言ってみれば、既存の社会システムに対する問い合わせであると同時に、既存の社会システムには存在しない行為の様式、活動の様式であったという点、この点に、われわれは、特に現代のボランティアの、独自の特性を見て取ることができる。少なくとも、現在のボランティア現象を把握するためには、「社会奉仕」「社会貢献」などの概念は、いささか大雑把に過ぎるくらいがあり、不適切であると言わざるを得ない。

第3に、自発性という属性について検討する。人々が自発的に参加する活動、あるいは、善意ある人々が自発的に参加する活動、それがボランティアである。このような定義もまた、多くの人を納得させるものである。たとえば、介護士が老人の世話をしたり、消防隊員が怪我人を救助したりするのは、それが仕事だからである。しかし、ボランティアは、別に仕事でも何でもないのに、自らの意志でその活動に従事している。この点こそが、ボランティアを特徴づけている、というわけである。ここで言う「意志」のひとつが、いわゆる「善意」なのだ、と考えてもよい。とにかく、人々の自発性こそが、ボランティアの属性なのだ、ということになる。

しかし、実際のところ、ここでは、何らの積極的な定義も、意味的規定もなされていない。職務で活動している人や、他人から言われて活動している人は、ボランティアではない、とされる。すなわち、職務でもないのに活動する人や、他人から言われてではなく活動している人を、われわれは、ボランティアと呼んでいる。さて、職務でもないのに活動する人や、他人から言われてではなく活動する人のことを、われわれは、「自発性をもって活動している人」とも呼んでいる。ということは、要するに、われわれは、「自発性の持ち主」という言葉を、「ボランティア」という語で置き換えているのに過ぎない。

自発性の持ち主とは何か、と言えば、それはボランティアのことである。ではボランティアと

は何か、と言えば、それは、自発性の持ち主のことである。ボランティアとは、われわれがボランティアとみなす人のことである、とでも言うべき、循環的な定義が、ここではなされている。つまるところ、自発性は、ボランティアを定義づける内在的属性ではない。われわれとしては、むしろ、こうした循環性を明確に自覚し、ボランティアなるものが、生活世界においてどのように定義され、受容されているのかを考えるべきである。

さて、以上3点、「無償性」「社会奉仕性」「自発性」が、いずれも、ボランティアに関する属性として、必ずしも適切ではないことを検討してきた。これらの検討は、同時に、現代のボランティアという現象の、ある特性を映し出してもいる。次章では、これらの議論を踏まえて、抜本的に異なる視座から、ボランティアの概念を再検討する。

### 3. 社会構成主義の視点からのボランティア

ボランティアという現象を考えるためにには、むしろ、循環的な定義を積極的に用いたほうがよい。ボランティアという現象は、当該の社会構造のもとで、人々の談話を通して、意味的に形成されるものである。こうした社会構成主義の視点に立つことで、われわれは同時に、ボランティアという概念の特異性をも明確化することができる。

前章の行論の含意は次のようなものであった。ボランティアは、必ずしも、無償の活動ではなかった。また、社会奉仕と断定すると、ボランティアの重要な側面を看過することになるのであった。さらに、自発性によってはボランティアを定義できず、むしろ、そこでは循環的な論理構造が露呈することとなった。

しかし同時に、次の事柄もまた指摘することができる。必ずしも無償の活動ではないとは言うものの、ボランティアとは無償の活動でない活動である、と断言することもできない。また、社会奉仕と断定することはできないものの、ボランティアが、社会奉仕ではないわけでもない。さらに、循環的ではあるものの、自発的な活動云々という、ボランティアをめぐる表現には、われわれを納得させる、ある種の真実味がある。

ここから導き出されるのは以下のようのことである。ボランティアという現象を、何らかの属性によって、積極的に定義することはできない。われわれはむしろ、ボランティアを、「何々ではないもの」「何々とは言い切れないもの」などといった形で、消極的にしか、規定することができない。このように、消極的にしか定義できず、定義としてはその条件を欠く、不完全なものであるにもかかわらず、われわれは、ボランティアなる現象を、確かな現実味のある、しかも身近で重要な事柄として、受け入れている。

われわれは論点を逆転させるべきである。ボランティアという現象を規定する、何らかの積極的な定義や属性を見出そうと努めるべきではない。むしろ、ボランティアという現象が、どのようにして定義されているのか、そして、ボランティアという現象が、いかなる意味を帯び、われわれの日常世界の中へと位置づけられているのか、そのことをこそ、考察すべきである。

すなわち、ボランティアという現象は、社会構成主義の立場から、再定位されなくてはならない。われわれの接するあらゆる現実は、人々の談話を通して構成され、変容し、われわれを規定していく。確たる現実や、明確な行為などが、あらかじめ存在しているわけではない。そうではなく、われわれ自身が持つ意味の体系や、それに基づく言語活動の産物として、われわれに馴染みの日常世界が、そして、種々の事物や、行為カテゴリや、心的現象が、形作られていく。これ

が、社会構成主義の発想である（社会構成主義の理論については、たとえば、Berger & Luckmann, 1967；Moscovici, 1984；Gergen, 1994）。

この考え方にして次のようになる。われわれがボランティアと呼び、そのように意味づけているからこそ、ボランティアなる現象も、われわれにとって理解可能、知覚可能なものとなる。われわれに固有の、言語的な意味体系と、それが踏まえてきた固有の歴史のもと、ボランティアなる社会的現実も、独自の形で意味づけられ、形成されてきた。こうしてつくられた、ボランティアという意味、ボランティアという社会的現実は、逆に、われわれ自身の認識のあり方や、行動のあり方を規定している。すなわち、われわれは、ボランティア活動を様々に評価してみたり、自身の人生計画の中に位置づけてみたりする。同時に、われわれは、ボランティアなるものを話題にし、人々とやりとりを行う。こうしたやりとりの中で、ボランティアという現象に対する意味づけも変容し、その姿や性格を変化させていくことになる。たとえば、従来はボランティアと呼ばれなかつたような活動が、ボランティアと呼ばれるようになったり、ボランティアに対するわれわれの捉え方や接し方が変わっていったりする（八ッ塚・矢守, 1997）。

さて、社会構成主義の視点から考えると、われわれは、ボランティアという現象を、さしあたり次のように位置づけることができる。

ボランティアと呼ばれる現象それ自体は、上述の通り、固有の属性を持たない。むしろ、既存の意味体系には属さない、新奇な事柄であるという点、すなわち、われわれの生活世界において発生した、異質で新しい現象であるという点、この点に、ボランティアの特質がある。

われわれの日常的世界は、意味の体系、具体的には、役割の類型、行為の類型、動機の語彙、等々によって、事細かに分節化され、秩序づけられている。日常的世界のことを、社会システムと言い換えるてもよい。言語のやりとりをはじめとする、われわれの日常的な行為の全般は、こうした意味の体系を前提として遂行され、それによって生活世界は構成される。

しかし同時に、社会システムは、常に、改変の可能性を包含している。言い換えると、われわれの生活世界においては、常に、新たな要素、新たな行為が生じる可能性が開かれている。

たとえば、在来の生活世界には、有償の活動と無償の活動、などといった、意味の区別が存在する。有償の活動というのは、企業労働に代表されるような、いわばお金と引き換えの活動である。それに対し、後者の無償の活動とは、従来的には、家事労働、趣味的行為、学生生活、等々といった、金銭的報酬とは無縁の活動を指す。

ではあるが、こうした区別にうまく乗らない種類の活動、すなわち、既存の意味体系には適合せず、うまく分節化できない種類の活動も、時には生じてくる。金銭的報酬を直接の目的とするわけではないし、むしろ、主婦や学生のほうが、活発に参加している。しかし同時に、金銭を必要ともするし、何らかの金銭的支給を受ける場合も多い。このような種類の活動も、現に発生する。

こうした種類の活動を名指し、表現するために用いられているのが、「ボランティア」という語である。在来の企業的な活動、給料と引き換えの活動とは、明確に異なるけれども、かといって、家事労働や、単なる学生のサークル活動ともちがう。このような、既成の意味的区別の範疇に含まれない新奇な活動、それが、本稿で問題としているボランティアである。

別の視点から言えば次のようになる。在来の社会システムは、人々の必要を満たし、社会体制を維持するための、様々な組織体や制度を発展させている。たとえば、現代社会においては、企業活動が大規模に展開され、社会生活の根幹を形成している。同時に、個々の人々に対しては、発達した行政機関が、種々のサービスを提供している。現代社会は、こうした組織体や、それら

を媒介する制度が織り成す、複合した体系をなす。

ではあるが、こうした既存の体系に、うまく位置づけることのできないような種類の活動、すなわち、既存の社会システムの範疇を超えるような、新しい種類の活動も、新たに生じてくる。拡大し複雑化する社会システムの、その全体を維持するためには、時々刻々、新たな要素、新たな活動が、導入されなくてはならない。

たとえば、行政体が提供するサービスと、住民自身が必要とする事柄との間には、往々、齟齬やズレが生じ得る。行政機関は、組織体である以上、常に十分かつ素早い対応ができるわけではない。このような際に、住民自身の必要に応えるべく、いわば、隙間を埋めるようにして、福祉、災害救援、情報公開、ネットワーク等々の活動を行う人々が出現することがある（災害救援についてはたとえば、杉万・渥美・森・八ッ塚、1995；八ッ塚・矢守、1997）。

こうした種類の活動を名指し、表現するために用いられているのが、「ボランティア」という語である。企業や行政といった、社会システムの伝統的な要素とはまったく別種の、新奇な形式の活動。しかし同時に、社会システムの存続のために、不可欠のものとなりつつある活動。こうしたもののが、本稿で論じているところのボランティアである。

要するに、ボランティアとは、生活世界ないし社会システムにおいて発生した、新奇な事柄に対して与えられているところの、名称のことである（Yatsuzuka, 1999）。このような、生活世界ないし社会システムにおける新奇な要素は、既存の意味体系には属さないため、それ自身では表現のしようがない。すなわち、ボランティアと命名されたことで、はじめて、それとして名指すことができるようになったに過ぎない。言い換えると、ここでは、「これがボランティアである」「ボランティアとは、われわれがボランティアと呼ぶもののことである」という、新たな命名、あるいは、トートロジカルな定義の過程が、発生していることになる。

逆に言えば、ボランティアという語が用いられたこと自体には、何らの必然性もない（八ッ塚・矢守、1997）。実際のところ、こうした新奇な事柄を指し示す語としては、ボランティア以外にも、篤志家、奉仕家、社会活動家、等々の語があり得る。ヘルパー、サポーター、パトロン等々といった外来語が、ボランティアという語の代わりに用いられていた可能性とて、あつたはずである。

もっとも、ボランティアという語が用いられたことそれ自体については、一定の論拠を見出すことも可能である。ここで論じている活動は、社会システムにおける空隙を埋めるような種類のものであり、特に、社会的な弱者に対してなされる場合が多い。また、ここで論じている活動は、こうした弱者を対象とするものである以上、無償で遂行される場合が多い。さらに、こうした活動は、その本性上、生活世界における既存の役割や、日常的な利得の関係を超えたところで遂行されることになる。

このように、当該の現象をおおまかに分類してみると、ボランティアという語を用いるのが、種々の可能性のなかでは一番すわりがよい、ということにもなる。単なる援助者というわけではなく、そこには、無償性との強い結びつきを見出すことができる（もっとも、前述の通り、無償性によってのみこの活動を特徴づけることはできない）。そこで活動はまた、多くの場合、職務として遂行されるものとは異なっているように見える。ヘルパーという名称や、篤志家という表現は、当該の現象を、今ひとつ正確に言い表していない。必ずしも最適というわけではないが、いくつかの可能性のなかでは、ボランティアという語は、まあまあふさわしい、ということになる（以上の過程は、社会的表象論における、分類と命名からなる係留の過程に対応している（Moscovici, 1984））。

さて、しかしながら、われわれは、ボランティアなるものに対して、こうした疑問や逡巡をあらためて感じるということはない。われわれは既に、「ボランティア」と呼ばれるところの、明確に定義された、確固たる現実があるのだという確識をもって、日常生活を送っている。これは、上述したような分類と命名がなされた結果、「ボランティア」なるものが、われわれの生活世界の一角を占める、確固たる現実へと、変容したからである。

厳密に考えて行くならば、先述のとおり、ボランティアなるものの内実は、極めて不明確である。ボランティアとは何であるのか、について、その属性を明示的に列挙することはできない。しかし、通常の場合、われわれは、ボランティアとは何であるかをよく知っているつもりでいるし、また、この不明確な事態によっても、取り立てて不自由を被ったりはしない。これは、われわれが、言い換えると、われわれの生活世界が、ボランティアなるものを、明確かつ確固とした社会的現実として、受け入れているからである。

ボランティアなる現象の、その内実は、実に曖昧かつ多彩である。それは、無償であるかに見えて、しかし無償ではないし、社会奉仕であるように見える一方、そうとは断言できない曖昧さを孕んでいる。結局のところ、われわれがボランティアと呼んでいるもののがボランティアなのだ、という、極めて曖昧な定義しか、そこには見出しえない。

しかし、ここにおいて、われわれの生活世界に特有の転倒が生じる。曖昧かつ多彩な、多様な現象が眼前にある。しかし、これらの現象は、いずれも共通して、ボランティアと呼ばれている。そうであるならば、これらの現象は、いずれも、何らかの共通性を有しているに違いない。あるいはまた、これらの現象の背後に通底する、何らかの本質があるに違いない。意味的体系のもとで暮らすわれわれは、往々にして、このような錯覚に陥る。この、何らかの共通性、あるいは、通底する本質とされるもの、それが、われわれがボランティア現象に対して感じるところの、現実味の正体である。

ボランティアというのは、現象としてはいろいろあるけれども、何か一貫した本質、明確なまとまりのようなものを、有しているはずである。このような錯覚が、われわれ自身の認識や行動をも、規定するようになる。その見え姿や現象形態は、状況に応じていろいろだが、全体としては、何らかの共通するまとまりをもつ。こうした意味で、ボランティアなるものは、木々や石ころと同等の、現実味を帯びた存在、すなわち社会的現実として、われわれに受容されるようになる。

さらに、こうして成立した、ボランティアなる社会的現実を、われわれは、日々の会話や行為のなかで、繰り返し用いるようになる。われわれは、ボランティアなる語を口にし、あるいは、他人や各種のメディアがボランティアなる語を用いているのを頻繁に耳にする。また、ボランティアと呼ばれる人の姿、ボランティアとして活動している人々の姿も、様々な場面で目にするようになる。

言い換えれば、われわれがどこで何をしていようと、あるいはまた、われわれがどのように考えようと、ボランティアなるものは、それ自身で、生活世界の中に確固とした場所を占めるようになる。こうなってしまえば、われわれはもはや、ボランティアとは何か、ボランティアを規定する属性とは何か、といった問題で、ことさらに悩む必要はないし、あえてそのような問い合わせする必要すらも感じなくなる（以上の過程は、社会的表象論における物象化の過程に対応している（Moscovici, 1984））。

以上が、ボランティアという社会的現実の、その存立の機制である。ボランティアという現象それ自体のうちには、それを特徴づける明確な属性などはない。むしろ、われわれの生活世界、

すなわち意味的世界が、ボランティアなる現象を作り上げ、特徴づけ、そして、生活世界において、それを日々運用し続けている。社会構成主義のもとでは、ボランティアという現象を、以上のように位置づけることができる（Yatsuzuka, 1999 をも参照）。

#### 4. ボランティア研究の含意

ボランティアは、個々人の善意や、社会貢献、社会奉仕といったトピックと結びつけて語られることが多い。しかし、われわれは逆に、善意や奉仕といった主題が、ボランティアという現象から、どのようにして派生してくるのかをこそ、問うべきである。ボランティアそれ自身は、資本主義社会における、社会システムの新たな複雑化過程として、検討されなくてはならない。

ボランティアという現象を考察するにあたって、何よりも重視されなくてはならないのは、その社会構造との関係性である。正確に言えば、資本主義社会における、社会システムの新たな構成素としてのボランティア、という問題を、われわれは、常に念頭に置いておかなくてはならない。

日常的には、ボランティアは、人々の善意に基づいて遂行されるもの、あるいは、社会奉仕と深く結びついたもの、として受容されている。しかし、こうした事項を既存の前提としてボランティアを論じることには、あまり積極的な意義はない。ひとつには、既に述べたとおり、これらの属性は、ボランティアの本質を明確に特定するものではないからである。

より重要なのは次の点である。善意性や社会貢献性などを、ボランティアに付随するものとして、いわば最初から前提して議論を行うことは、結果として、前章で述べたような、ボランティアという社会的現実の構成に、自らも加担することである。ボランティアの善意はいかほどであるか、とか、ボランティアの社会貢献に対する度合いは、などといった形で主題を設定することにより、われわれ自身も、ボランティアをめぐる、日常的な言語的やりとりの中へと参入し、それに取り込まれてしまうことになる。もちろん、このような議論を行うことそれ自体に意味がないわけではない。しかし、こうした、いわば無反省な言説を積み重ねることは、結果として、ボランティアという現象の根底を見落してしまうことにつながる。

ボランティアという現象は、意味体系や社会システムとの関係、すなわち、社会構造との関わりにおいて、はじめて生じるものである。われわれの暮らす生活世界が、どのようにして出来上がっており、そこにおいて、言葉や行為は、どのように織り成されているのか。こうした問題を抜きにしては、ボランティアという現象を的確に把握することはできない。

より限定的に述べるならば、ボランティアは、高度に発達した資本主義社会という前提のもとで、はじめて成立する現象である。人々が、自身の生計を立てるだけで精一杯であるような時代、あるいは、過酷な奴隸的労働を強いられるような時代においては、現代的なボランティアなる概念はほとんど意味をなさない。行政体が発展し、社会の中で大きな役割を担っている一方で、個々人の微細なニーズに対しては必ずしも十分に対応できていない状況。あるいは、企業活動が活発化し、豊かさを享受する人々が少なからず存在する一方、こうした企業活動自体がひとつの原因となって、不公正や社会的弱者が生み出されるような状況。大雑把に言えば、このような背景のもとで、ボランティアという存在もまた、その必要性、有用性を、見出されるようになる。

繊細な議論を省いて言えば、ボランティアには、社会システムにおいて、そこに欠けている要素を再導入するはたらき、あるいは、社会の財を再配分するはたらきがある。当該の社会システ

ムにおいて、不利益を被っている人や、弱者とされている人に対して、労働力を提供したり、何らかのケアを行うなどの対応をすること。さらに言えば、政策的主張などを行うことによって、こうした社会システムそれ自体の問題性を解決しようと試みること。この点に、ボランティアが果たす、社会的な役割、社会的な機能がある。

その意味では、ボランティアという活動を、何も無理やりに、善意性や社会奉仕性などと結びつける必要はない。むしろ、活動の内容や状況によっては、こうしたトピックそれ自体が、活動の妨げとなる場合もあり得る。実際のところ、ボランティアの範疇に属する活動でも、その規模が大きくなれば、企業的原理や経営ノウハウをいかに導入し、効率的、すなわち有効な活動を開拓するか、ということが、焦眉の問題となっている（たとえば、Drucker, 1990など）。

しかし他方で、ボランティアの活動には、企業的原理や経営感覚などといった事柄とはまったく異質の要素があることも確かである。ボランティア活動のなかに、企業においては得られない種類の喜びや生きがい、体験を求める人は数多い。

ここにあるのは、資本主義の構造を保ちつつ、同時に、金銭ならざる要素を交換することで、社会を成立せしめようとするという、社会システムの新たな動向である。確かに、ボランティアの活動は、一方では、資本の論理、すなわち、企業的原理に対するアンチテーゼとしてある。人々は、たとえば、金儲け一辺倒でない生き方を模索し、あるいは、会社では出会えない喜びを求めて、ボランティアの活動へと参入していく。

ではあるが、社会システムという視点でみれば、こうしたボランティアの活動を、資本の論理の、その延長線上にあるものとみなすことも可能である。たとえば人々は、その活動の見返りとして、人と人との親密な出会いと交流であるとか、人に感謝される体験、役に立っているという実感、あるいは、自分自身の社会的な価打ちの再発見、等々といった、金銭では計ることのできない利益を得る。

もちろん、その活動において、金銭的な利益はおろか、いかなる見返りをも、一切期待していない、という人もある。しかし、このような場合にも、その構造には、資本の原理と類比的なものを見て取ることができる。人は、その身を現地に運び、自身の身体を用いて種々の活動を行う。ボランティア活動を行う人は、言ってみれば、自分自身や、その活動能力を、相手の人や状況に対して、贈与している。もちろん、当人は何らの見返りも期待していないかもしれないし、いかなる形での返礼もそこでは生じないかもしれない。その意味では、これは純粋な意味での贈与である。

しかし、いずれにしても、ここでは明確に、人ととの媒介過程が生じているのであり、同時に、この贈与は、相互の関係において、何がしかの変化を惹起せずにはおかないと。こうした過程は、原初の交易のような、原始的な交換過程と同じ構造をもっている。

あらためて整理すれば次のようになる。ボランティアとは、複雑化する社会システムを改変し維持し続けていくために生み出された、新たな行為様式のことである。ボランティアに対する関心が近年特に高まっているのはそのためである。同時に、ボランティアとは、資本主義の構造が深化し、金銭ならざる要素をも交換するようになった、その先端における動向のことである。貨幣経済の進展の中で、貨幣以外の事柄を流通させ、新たな価値を生み出そうとする営み、このように、ボランティアという現象を把握することもできる。

さて、以上のようにボランティアを位置づけることにより、われわれは、次のような示唆を得る。

ボランティアという現象を研究することは、個別の社会現象に関する研究であるというだけである。

はなく、社会構造の全体を考察することである。資本主義の構造が、その進展の帰結として、ボランティアという新たな活動類型を不可欠のものとしつつある、という論点を、本稿では提示した。

善意や社会奉仕、自発性などといった主題は、こうした社会構造を前提として構成され产出されるものなのだと、われわれは考えなくてはならない。当然のことながら、良き行いとされる事柄は、歴史的経緯や、社会・文化的構造に規定され決定される。社会奉仕の活動も、奉仕する対象としての社会をどのように捉えるかに左右される。ボランティアの善行もまた、社会構造との相関において決定される。

さらに言えば、個々人の、ボランティア活動への自発的な参加もまた、社会構造と相即したものとしてある。本稿で採用した、社会構成主義の視点から考えれば、ボランティア活動に参加しようとする動因もまた、社会構造のなかで生成し、事後的に、種々の動機の語彙によって意味づけられる。

ボランティアに対する関心の高まりや、活動に参加しようとする意志の高揚が、どのようにして形成されているのか、それを問うことも、社会心理学にとっての重要な課題となる。本人の自由意志、自発性は、社会構造に定位してみた場合、いかなる機能を果たし、社会における役割を充当したことになるのか。ある種の、暗黙裡の強制や、支配的な社会的動向に対する盲従などといったかたちで、ボランティアに対する取り組みが進展している可能性はないのか（たとえば中野、1999；渥美、2001）。こういった問題を検討することもまた、社会心理学の課題となる。それは同時に、たとえば教育や福祉の領域において、ボランティアや社会奉仕などといった概念が、どのように語られ流通しているか、あるいは、こうした概念や活動を、われわれはいかに扱っていくべきなのか、などといった、実践的な問題とも不可分である。このように、ボランティア研究という主題は、一社会事象に関する個別研究ではなく、社会心理学の総体にかかる、理論的考察と実践的諸活動との結節点をなす。

## 文 献

- 渥美公秀 2001 ボランティアの知－実践としてのボランティア研究－ 大阪大学出版会。
- Berger, P.L. & Luckmann, T. 1967 *The Social Construction of Reality - A treatise in the Sociology of Knowledge*. London: Allen Lane =1977 山口節郎訳『日常世界の構成 アイデンティティと社会の弁証法』新曜社。
- Drucker, P.F. 1990 *Managing the nonprofit organization*. New York: Harper Collins Publishers. 上田惇生・田代正美（訳）非営利組織の経営 原理と実践 ダイヤモンド社。
- Gergen, K.J. 1994 *Toward Transformation in Social Knowledge* (2nd Edition). London: Sage. 杉万俊夫・矢守克也・渥美公秀（監訳）1998 もう一つの社会心理学 社会行動学の転換に向けて ナカニシヤ出版。
- Moscovici, S. 1984 The phenomenon of social representations. (In) R.M.Farr & S.Moscovici (eds.), *Social representations*. Cambridge: Cambridge Univ. Press.
- 中野敏男 1999 ボランティア動員型市民社会論の陥穿 現代思想, 27 (5), p.72-93.
- 杉万俊夫・渥美公秀・森永寿・八ッ塚一郎 1995 阪神大震災におけるボランティア組織の参与観察研究－西宮ボランティアネットワークと阪神大震災地元 NGO 救援連絡会議の事例－ 実験社会心理学研究 35 (2), p.218-231.
- 八ッ塚一郎 1998 阪神大震災における既成組織のボランティア活動－参与観察と聞き取り調査－ 奈良大学紀要, 26, p.151-165.

- 八ツ塚一郎 1999 阪神大震災における小規模創発的ボランティア団体に関する研究 平成8～10年度科学研究費補助金（基盤研究（A））研究成果報告書「阪神大震災におけるボランティア活動の全貌とその中長期的インパクト」（研究代表者・杉万俊夫（京都大学））p.40-55.
- Yatsuzuka, I. 1999 The activity of disaster relief volunteers from the viewpoint of social representations: Social construction of Borantia (volunteer) as a new social reality after the 1995 Great Hanshin Earthquake in Japan. (In) T.Sugiman, M.Karasawa, J.Liu and C.Ward (Eds.). *Progress in Asian Social Psychology*, Volume 2. Seoul: Kyoyook Kwahaksa. p.275-290.
- 八ツ塚一郎・矢守克也 1997 阪神大震災における既成組織のボランティア活動－日本社会とボランティアの変容－ 実験社会心理学研究 37 (2), p.177-194.